

「ふたたび、歩み始める」

～人の動きと再出発の流れ～

昨年の熊本地震では、たくさんの方が長年住み慣れた住家を失い、日々の安らぎある生活を奪われてしまいました。その多くは長く不便な避難所生活を強いられた後、やむなく地域を離れ、プレハブ仮設住宅などに生活の場を移しました。中には、みなし仮設住宅や公営住宅など、一時的に町外へと住まいを求めた人も多くいます。また、早々と移住を決意した人もいます。

昨年末、町がプレハブ仮設住宅およびみなし仮設住宅に入居する世帯を対象に実施した「今後の住まいの意向等に関するアンケート調査」の集計結果によれば、「元の場所に再建したい」が52.9%、「住宅を修理して住み続けたい」が4.3%、「別の場所に移転したい」が19.6%、「公営住宅に入居したい」が28.6%、「未定」が14.3%などとなっており、元の場所に住みたいという世帯が全体の約6割となっています。

さて、発災からもうすぐ1年半の歳月が経とうとしています。

再出発を目指す人たちの、住まい再建の流れは始まっているのでしょうか。人の動きなどから追ってみます。

動き人口

3万4,500人前後で推移していた町の人口は、震災の発生を境に一気に減少へと向かいました。

発災直前の昨年3月末には3万4,499人(1万3,455世帯)だった人口が、3か月後の6月末には328世帯の828人(2.4%)が減少、1年後には510世帯の1,498人(4.3%)の減少となり、3万3,001人(1万2,945世帯)と13年前の水準まで落ち込んでいます。

その後、町外に転出した人たちは、町内に戻り始めているのでしょうか。

今年4月以降の推移をみると、6月まではほぼ横ばい状態で、人口流出に歯止めがかかったように思われます。また、7月になると、前月比で46人増とやや持ち直しを見せており、若干ですが人口回復の兆しが見え始めています。ここには、町外のみなし仮設住宅などの人の動きが影響しているのでしょうか。



表内のデータは住民基本台帳上の数値であり、実際に町外へと流れている人口はまだ多いのではないかと考えられます。